母親は何も話してくれないと子に不満を持つ。父親は本児の好きな将棋の相手をと勧めるが無関心・外泊時も本児と祖母の二人の生活が殆んどで帰るより病院の方が楽しいとの本児の感想。親への遠慮がみられ、職員に甘え要求を出してきたり、親との接触より明るくふるまう。

事例Ⅱ　患児Ｂ（15才）

親との接触を持ちたがらない様な発言をする子に対して親は言われるままに行動をとる。実際には本児の意に反した発言であり、親が主体的に接触を持ってくれる事を期待している。

ＤＭＰ児（者）と親に対してのアンケートは必要としながら検討の段階で終始してしまった。しかし上記のような事例を観察してみるとやはり今後アンケート等を利用し、データとして残すべきであると考えている。

アンケート作成を検討した結果、子の幼年期、少年期、成年期と親は子に対してどの様な感性期待、理解、要求等を持っているのか、また子どもに対しても同種類の質疑を投げかけてみたいと考えた。

〔考　　察〕

今回この様な案を打ち出すのみで終ってしまったが、まず感ずる事は、子どもの個々の行動についてその都度断片的な知識を得る事だけでなしに、日常の中で共に悩み、共に苦しむといった様な日常子どもと生の人間的なふれあいを深めてこそ子どもが見えてくる。その中でお互いがそれぞれについて理解を深め結びつきも深まっていくであろう。

しかし、患児（者）と親については日常の中で喜怒哀楽を共にすることが殆んどまれであり、お互いがそれぞれ悩み、心を痛めている状態である。

今後このＤＭＰ児（者）と親との問題を明確にする為に各方向から観察を深め、アンケートをはじめとする資料収集を行ない、患児（者）と親の望ましいあり方を見い出していくとともに、職員としてのアプローチの仕方をも考えていきたい。

13、Ｐ・Ｍ・Ｄ児の社会性
―　絵画欲求不満テストを実施して　―

国療　再春荘
末　竹　寛　子

〔目　　的〕

私達は、日常生活の中で、様々な欲求不満場面に遭遇する。その欲求不満場面における反応は

人それぞれに、その人独自の一定のパターンがあるように思われる。

P・M・D児42名（検査不能者が10名いて、実際の数は、32名であった。）が、欲求不満場面において、どのような反応を示すかを調べる目的で、小児病棟患児35名をコントロール群としてP・Fスタディを実施した。

〔本検査の内容と構成〕

絵画の欲求不満場面（16の自我阻害場面と8の超自我阻害場面の計24からなる。）を被験者に見せ、反応語を書かせる。その反応語を「どんな方向に攻撃を向けているか」、（外罰、内罰、無罰の3方向）、「どんな型か」、（障害優位、自己防禦、要求固執の3型）で、9の因子に分類する。各因子を列挙すると、外罰方向障害優位型E′、内罰方向障害優位型I′、無罰方向障害優位型M′、外罰方向自己防禦型E、内罰方向自己防禦型I、無罰方向自己防禦型M、外罰方向要求固執型e、内罰方向要求固執型i、無罰方向要求固執型m、である。この他に、超自我阻害因子として、E、Iがあげられる。EはEの変型で、負わされた罪に責任のある事を攻撃的に否認する反応、IはIの変型で、一応自分の罪は認めるが、避け得なかった環境に言及して本質的には失敗を認めない反応である。

〔結果と考察〕

まず、G・C・R％を調べた。このG・C・R％というのは、欲求不満をきたしたとき、年令相応の世間並の反応ができるかどうかをみる尺度、いわば、「集団一致度」とかいわれるものだが筋ジス病棟患児群、小児病棟患児群、（以下、筋ジス群、小児群とする。）の両群に有意な差はない。両群ともに、低い者が約35％ぐらいいて、やや低い方に傾いている。

次にプロフィールだが、因子別に分析した結果は、両群に有意な差は見られない。似たようなプロフィールを示す、両群ともに、社会に適応するために必要な、「適度の攻撃性」すら備えていず、自責、自己非難、罪償感が強く、無関心かそれとも気が弱くて、自分の気持を抑圧しているような人が多くいるといえる。（理由：M′、M、I、i、I％の頻度が高いから）

超自我因子別に分析すると、小児群に自責、自己非難の強い者が多く（I－I％の出現頻度が高い者が小児群に多い。危険率 0.5％）、筋ジス群には、一応悪いと思いながらも、言いのがれをして、自分の失敗をなかなか認めようとしない自己保身的な者が多い。（I％の出現頻度が高い者が筋ジス群に多い。危険率5％）EとIをプラスしたパーセンテージについて述べると、（これは、精神発達、社会性の発達と密接な関係があるもので、これが非常に低いものは、自我を主張し、自分を積極的に守ることができないことを示す。）小児群が筋ジス群より、E＋I％の低い者が多いことが 2.5％の危険率で言えた。しかし、これによって、筋ジス群が、小児群より社会性が発達していると考えるのは早計で、初めに述べたように、筋ジス群に、検査不能の低IQ児が約24％いて、彼らが、社会性の発達も遅れているのであろうことを考えあわせると、両群は、差がなくなると思われる。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

〔目的〕

私達は、日常生活の中で、様々な欲求不満場面に遭遇する。その欲求不満場面における反応は人それぞれに、その人独自の一定のパターンがあるように思われる。

P・M・D 児 42 名(検査不能者が 10 名いて、実際の数は、32 名であった。)が、欲求不満場面において、どのような反応を示すかを調べる目的で、小児病棟患児 35 名をコントロール群として P・F スタディを実施した。